



これまでの議会改革

～これからのいわき市議会に望むこと

東日本で初めて一問一答方式を取り入れるなど

いわき市議会は長年にわたって議会改革に努め、

市民の皆様の声が反映される開かれた議会を目指してきました。

そうした経緯を知るOB議員の方々から、お話しをうかがいました。

一問一答方式の導入

—— 議会改革は、平成十二年十一月の議会改革調査検討委員会の設置がスタートラインになっていますが、その経緯をお聞かせください。



政井 平成十二年は改選のときで、新しい議員が確定し、私が副議長、亡くなった坂本登氏が議長という体制で四年間務めました。議会改革の話は前から出ていましたが、具体的になったのは十二年になってからです。七項目(①議長権威の高揚 ②一般質問の活性化 ③会議の市民向けテレビ放送 ④市民への議会日程等のPR ⑤

休日・夜間会議の開催 ⑥専決処分への適切な対応 ⑦その他議会の活性化に必要な事項)(本編(第一〇期・議会活性化の推進)を参照)のようなことをやったらどうかと始まりました。一問一答方式の議会や休日・夜間の議会、テレビ放映といったことは資料で見聞していたものの、実際にどういふものなのか、とにかく先進地に行つて議会を傍聴してこようと、議長、副議長が中

心となって先進地へ視察に出向きました。まず、初めに行つたのは一問一答方式が進んでいた別府市議会でした。それは委員会ではな



かかりすぎていたためです。議員が何を質問したのか頭から抜けているときに答弁が後から出てくるのではなく、質問に対してすぐに答えをもらう形式にすれば、傍聴している市民の皆様に分かりやすい議会になるのではないかと思います。議会改革調査検討委員会で一問一答方式を取り入れたわけです。

誰が最初に登壇するかとなったときに、当時、私が最大会派の会長だったものだから、会長がやるべきだと勧められました。登壇することになりました。それまでは、相手の顔を見ないで質問していたのですが、今度は質問席が設けられ、答弁する市長、助役(当時、現在は副市長)の方を向いて対面形式でやるわけですから、一番最初にやったときはやはり緊張しました。当然、質問事項は通達しているのですが、時間の配分が難しく、通告したうちの最後の二問ぐらいは質問できませんでした。それと同時に、初めての質問者だったため、他の市議会の人も

見に来られ、傍聴席が未だかつてないくらい満杯だったので、余計に緊張してしまいました。後ろから見られているというのは、意外と嫌なものですね。ただ、良い経験をさせていただいたと、今でも感謝しております。

国の地方分権改革を契機として

—— そもそも、議会改革のうねりは、いつごろからなのでしょう。

遊佐 私が当選したのが平成十二年の改選時で、そのころから、いわきの議会改革の検討が始まっています。議会改革というのはどこから来たのかを考えないと、間違った方向へ行ってしまうのではないかと思っています。というのは、平成十一年七月に地方分権一括法が成立し、今までの国による義務付け、枠付けがなくなり、機関委任事務を各自治体に委譲することになりました。それによって地方議会の自己決定権が大きく広がり、議会も改革をしていかなければならない。いわゆる地方自治の変わり目であり、全国の各自治体でもそういう動きが出てきました。やはり国の地方分権改革であって、一定の方向付けがされて動いてきているわけです。

私は民間企業で仕事をしていましたが、平成十に入ったころにバブルが崩壊しました。平成十



二年というのは二〇〇〇年、いわゆるミレニアムです。そのときの社会情勢を考えると、バブル崩壊後の不良債権処理も含めて国がたいへんな状況でした。その中で小泉内閣が誕生して三位一体の改革が進められ、補助金や国庫負担金



遊佐 勝美



の改革、税源移譲、交付税の改革といった流れの中で、それにどう対応するかというのが地方自治体に求められてきました。

政井 今言われたように地方分権が進んできました。平成十二年はいわき市が中核市になって二年目です。それで具体的な議会改革の機運も高まってきて、市民にとって議会というのはどうあるべきなのかという問題があつて、本当

に開かれた議会というものをどう作っていくかということも、一つのテーマでした。

報酬削減よりも定数削減を

—— 議会改革調査検討委員会は、そのあとに議会改革推進検討委員会に改称されますが、当時のことで特に思い出されることはありますか。

●●●●●●●●

遠藤 私が一番記憶に残っているのは定数削減についてです。報酬を下げるべきという意見は、確かに市民からも聞こえていたのですが、議員活動に定休日はなく、三六五日働いているので、報酬を下げるということについては、個人的には適当ではないと考えていました。ただ、市民の望むところが経費削減であるのなら、定数削減の方がよりわかりやすいだろう。それで、私は定数削減を進めていった記憶があります。

一問一答での会派の調整の件もありましたが、当初は、これまでの歴史の中で、会派の構成人数によってある程度の割り当てがありました。代表質問、一般質問にしても、日程・バランスが決めやすかったのですが、回を重ねるごとに登壇に手を挙げる議員がどんどん多くなり、それをどう調整するか腐心しました。テレビが各家庭に二台、三台の時代になって、市民の方は国会の予算委員会での質疑も含めてテレビ中継を見ているから、そういう論戦をいわゆる



諸橋 義隆

地方議会もやったほうがより分かりやすく、開かれた議会になるのではと思っていました。

海外研修の廃止

—— 議会改革の議論の中で、できたこと、できなかったことで印象に残っていることはありますか。

●●●●●●●●

政井 当時、民間のテレビ局の深夜近くの放映権を買って、「いわき市議会ダイジェスト」といった形で、当日のいわき市議会の本会議の状況などを、テレビ放映してはどうかという話はよくしていました。実現はできませんでしたが、そういうのをやっているところもあります。

諸橋 実現したことで私が印象深かったのは、議員の海外研修の廃止です。私たちのころは、東北議長会、全国議長会での招集で、二期生になれば中国に、三期生になるとヨーロッパ。四期

生になると中国の撫順市。五期生になるとオー
ストリア、ニュージーランド。六期生になると
カナダ、アメリカと海外研修を行っていました。
しかし、研修なのか観光なのかとマスコミで大
きく取り上げられ、いわき市議会でも検討した
結果、すべて廃止になりました。ただ私にとつ
ては、一般の観光では行けないところにまで視
察に行けて、大いに勉強になりました。一つく
らいは残してあげたかったと思います。

遊佐 私は四期やりましたけど一度も研修には
行っていません。当時はそういう雰囲気があり
ました。残っているのは、友好都市である中国
撫順市との交流ですが、日中間の政治状況も
あつて、現在は中断しています。やはり社会の
状況から、縮み志向みたいのがあつて、議員
特権ではないかと新聞で書かれ、報酬の引き下
げや議員定数の削減、海外研修の廃止といった
方向にどんどん進み、同時に議会改革の一環も
含めて、そうした流れになってきたのかなと思



遠藤 重政

います。

諸橋 海外研修は、福島市議会や郡山市議会の
方々と一緒に行きますから、意見交換や勉強の
場にもなります。そうした機会がなくなってい
るので、今後新たに議会同士での意見交換会み
たいなものをやればいいのではと思っています。
遠藤 私の記憶では、県の議長会の招集で二期
生議員二十人と中国に行つたのですが、以後会
うたびに言葉を交わし、交流や情報の交換には
非常に役に立っています。

他の市議会との交流の重要性

—— 他の市議会との交流はやはり大切で
しょうか。



政井 常磐三市といつて、いわき市、高萩市、北
茨城市は昔の炭鉱のつながりで、ずっと交流を
していました。

諸橋 三市の議員さんがお互いものすごく助け
合う仲間でした。

遊佐 現在も常磐三市の交流はありますが、あ
くまでも意見交換会です。道路延伸のための情
報交換活動や地域医療での協力といったことで、
レクリエーションを含めたものではありません。

安部 こうしたことを含め、いわき市議会の議
員は見識が高いと思っています。去年、兵庫県の
の県会議員の政務活動費の使い方が問題にな



り、さらに富山市議会についても大きく取り上
げられています。それは議員以前の一般常識
の範疇です。そうした問題はいわき市議会の議
員の中には全然ありませんでした。政務調査費
は飲み食いには使わないようにしましょう。飲
み食いは自分のお金から出しましょう。キチン
と一円から領収書を付けて市民の皆さんに公表
しましょう。これらは最初からやっていること



で、いわき市議会は、何ら問題はない。私はいわき市議会に対して敬意を持っています。

政井 いわき市議会の場合、政務調査費は会派ごとに支給されて、会派で全部管理して、一円から全部領収書を付けています。そのへんのところがなかなか理解されなくて、みんな報酬のほかにそれだけ個人がもっているのではないかとという誤解をしている人もいますが、それは違います。

安部 結局は議会を構成する個人の意識が高くないとそういうのはなくなりません。それがいわき市議会の中からは一切出ていないというのは、そうした見識の高い人ばかりが選ばれて

いるのではないかと思います。

専門性を高め、市民の声を計画に

—— これからのいわき市議会に望むこととして、どんなことがありますでしょうか。

●●●●●●●●

諸橋 私は議員を辞めて五年になりますが、辞めて思ったことは、議員は何でもいいから一つ専門的なものを持つこと。要は、教育分野、福祉分野というように、他の議員にも負けないような専門性を身に付けるということです。なにしろ、議員になると各会派で委員会を割り振られ、「全部覚えなさい」と言われるけど、全部覚えるのは容易ではありません。私は、議員も専門分野を持ち、その分野では誰にも負けない専門家をつくっても構わないと思っています。そのかわり、委員会などで細かく何でもチェックできないといけません。というのは、私が市議会議員に初当選したときに、議会事務局の課長をやっていた方が「皆さんご当選おめでとうございませう。ただし皆さんは議場における一票の議決権を得たにすぎません。執行権は市長を初め執行部の皆さん方です。」と言われたのです。議員というのは何でもできると入ってききましたが、議場における一票の議決権しか権利はないのかと。一票の議決権しかない議員ならば、やはりチェック機能を高めるためには専門

の議員として知識を持っていいのではないかと思います。

遊佐 今おっしゃったのが、まさに議会改革の本質だと思います。結局、執行権はないのですが、議決権を行使する際に、その議決権を行使する以前の、例えば計画をつくるプロセス段階で、そこにいかに議会が関与して市民の考え方を取り入れていくかというのが大事になります。そういう点が、ますます求められているから、諸橋さんがおっしゃった内容は、まさしく議会改革の本旨ではないかと思っています。

そういう面で、市民の皆さんの目線でいろいろと今までも改革に取り組んできましたけれども、やはり本当の改革というのは、人材を育成することではないでしょうか。人口が減少し、資源が限られている中で、将来の計画をつくっていくときに、どういうふうを考えて構築するか。そのためには財政はどうあるべきで、保健福祉、医療、教育はこうあるべきだとか、そういうのを計画にどうやって織り込ませていくのかというのが、議会の本場に重要な部分だと思います。ですから、これからの議会改革というのは、人材の育成や自己の能力の向上、さらには議会全体の能力を高めるといった方向に、いかに進んでいけるか。一番難しい問題ですけれども、一番重要なことだと思います。

安部 議会報告会というのを市内各地でやっていますが、聞くところによると参加者が少ない。



いろいろな市民の方にお話を聞きますけど、やっぱり難しいんですよ。皆さんは自分の生活で一杯で、「任せるから」というのが圧倒的に多くて、「ここの部分をこうしろ」とか具体的な話は、ほとんどない。だから私は、住民の声をどうやっ

て施策に生かすかというのは、住民の皆さんが今何を感じているのか、*「感じ」*を聞くんですね。例えば「こういう制度が今度始まりますよ」と言ったときに、「それはちょっと勘弁してよ」とか、「もうすこし緩和してよ」とか。そういう*「感じ」*を聞いたうえで、これはこう直すべきじゃないかということ、執行部に提案するとか。そうした形でやらないと、なかなか住民の皆さんの気持ちを施策に反映させることはできないのかなと思います。

大上段に構えて市民の皆さんに意見を聞きますということも必要なのかもしれないけれど、住民が自助、共助、公助という中で、自分たちもしっかり市政に参加しましょうという仕組みを考えなくてはいけない。昔からのテーマですが、なかなかそれがうまく実現できない。それはどこの自治体も同じで、そういうことを最近強く感じています。

その反面、議員の数が多いという声はあるわけです。ただ議員の数を減らすということは執行部と対する監視の目が少なくなるわけです。そこを分かっておっしゃっているのかは疑問ですが、住民の皆さんがもっと気軽に参画できるような場というのを、今、いわき市議会が挑戦してやっているのだからと見えています。

政井 市民に開かれた議会をどのようにしていくのか。政治のことは分からないと言う市民の方がいらっしやいますが、それを一人ひとり

にわかっていただく、そういう努力が個々の議員に求められるのではないかと思います。一カ所に集めて報告会をやったからといって、住民の人は理解できているのか。それは一人ひとりが膝を詰めて、そこで話をしていくところに理解が得られていくのではないかと私は思っています。いろんな媒体を使って知らせることはできるでしょうが、煎じ詰めれば一対一の対話と



どうか、そういうことが議員にとっては一番大事なことだと思います。

遠藤 自分が自信を持って言えるのは、信頼されて選ばれたということです。そういう強い自負を持って活動することによって、市民の方々に信頼していただけるのだらうと私は認識をしています。ですから、私は豊間地区の議員だとは決して言わないで、いわき市の一議員であると言っていました。各方面でかなりの数の報告会を開いてきましたが、参加してくれる方は後援会に入ってくれる方々が大半で、それ以外の方は、人づてに私の活動が伝わって、後で自分の関係につながり、それが自分に対する信頼になっています。ですから、昨年からやっている議会報告会に、そう簡単に人は行かないと思います。それまでやっていたのは、市長が先頭になってやる市政報告会。これは要望活動の一環としてやってきました。それと重なってしまい、要望の場になってしまおうと思います。あくまで細かい活動の中で、個人個人がいろんな角度から報告会をすることによって、市議会に目を向けてくれるのではないかと感じています。

これからは、諸橋さんのおっしゃるように、専門職がそれぞれ手を挙げて、それぞれのエキスパートを議会の中にどんどん組み込んでいくことで議会の活性化につながれば、役所の職員も頑張る以外にない。一問一答でたいへんですから、そのほうが活性化にはなると思います。

